

今こそ地域からの視点を

新妻 弘明

機能しなかった上からの流れ

筆者は東日本大震災の被災地仙台に住んでいる。この度の震災はいろいろな事を我々に教えてくれた。それらの一つは「普通の地域の、普通の人々の、普通の営み」の大切さである。これは普段、マスコミに取り上げられることも、学界で議論されることもない。行政にとってもルーチンワークの対象である。この度の震災ではこれが一挙に失われたわけである。そしてこの「普通の地域の、普通の人々の、普通の営み」が実は世の中の大部分を占めていることを思い知った。

普段マスコミに取り上げられることのほとんどは、権力やお金の流れに沿ったものであり、また、学界で注目を浴びるものは、そのときの学界の価値観の流れに沿ったものである。これらはちょうど大きな岩塊に上から水をかけるようなもので、その水は流れるところには流れるが、流れないところには流れない。そしてそれが実社会という底辺に行けば行くほど、流れない場所の割合は大きくなる。そこでは権力やお金や学界の価値観に沿った課題は取り上げられるが、「普通の地域の、普通の人々の、普通の営み」に潜む多くの、そしてその地域にとって切実な個々の問題はなおざりにされる。

環境問題は、この「普通の地域の、普通の人々の、普通の営み」とそれをとりにまく環境との相互作用の総体である。環境問題において、研究者が地域に入り、地域の現実の問題に直面し、それらに真っ正面から取り組むことの重要性はそこにある。震災は環境問題の最たるものである。

震災時において、この上からの流れはほとんど機能しなかった。普段地域に入ることのない上級官庁、一流企業、そして一流大学の人間は、想定外の事態になすすべもなく、また動いても空回りするだけであった。その一方で、普通の人々の普通の営みが、お互いを助け、生きる活路を見出し、お互いを励まし合った。そして今は地域の復興の真の原動力となっている。



図1：震災から4ヶ月過ぎ、壊滅した集落を眺める家族。集落のあちこちには何事も無かったように草々が芽吹き、背景には緑豊かな山々が広がっていた。大自然の恐ろしさと豊かさ、そしてそこに暮らす人々のいとなみが垣間見えた。今、被災地の内外では復興バブルが吹き荒れている。数年後、この復興バブルが去った後、被災地に何を見るのであろうか。

どのような人間が活躍したか

ではどのような人間が震災に際して活躍しているのでしょうか。それは学歴に無関係に「自分の頭で考え、自分の言葉で話せる」人間である。

我が国では、明治維新以来、富国強兵のための教育が推し進められ今日に至っている。そこでは、ある普遍的な能力を持った代替可能な人間の育成が重視される。コンピュータにソフトウェアをインストールするように、高等教育では一定の品質が保障された普遍的な能力や知識が付加される。そこでは人間の個性ではなく、その知識や能力そのものが重視されるのである。その付加された能力とマニュアルによれば、想定された課題である限り、お互いの人間的コミュニケーションがなくとも一定の成果をあげることができる。整備された道路を、交通ルールを守って一定の運転技術で運転していれば、ドライバー間のコミュニケーションが無くとも無事目的地に到着できるのと同様である。

学問や技術の分野でも、いつしか世界中どこでも通用する普遍性や一般性、客観性が過度に重視され、個別の事象や地域の史実、あるいは当事者としてのものの見方を軽視するようになってしまった。

このような教育は、自分である必要のない人間を生むと同時に、多くの悩む個人を生んでいる。近年とみに、この付加された知識や能力と、個性との乖離、そして人間としてのコミュニケーション能力の低下が進んでいる。このような教育課程を勝ち進んだ人間が高学歴社会を構成しているが、その付加された能力が高ければ高いほど、その人間性との乖離が大きくなるのは皮肉である。平時ではその能力によって、退化した人間性を取り繕うことができるからである。

震災は、深刻な想定外の事態の連続であり、個々別々の事象の集合である。そこではマニュアルも、従前の「上からの流れ」に沿った思考も、一般論も統計論も役立たなかった。一人の人間として地域に入り、個々の地域の、個々の被災者の生の姿に接することなく、従前の「上からの流れ」に沿った思考と発言を繰り返し、「御用学者」の汚名をきせられた専門家も少なくない。

このような中であって、地位や学歴に関係なく、「自分の頭で考え、自分の言葉で話す人間」が活躍したのである。

私の研究活動の系譜

私の元々の専門は電気・電子計測工学である。計測工学では「どのように計測するか」はもとより「何のために計測し、その結果をどのように用いるか」が特に重要である。私は物質の破壊現象の研究を1975年以來行って来た。電気工学と機械工学との境界領域である。私はその研究を通して、専門と専門の狭間の広さを実感した。次に、その研究は地下計測の分野に発展した。1980年頃のことである。当時、地熱開発では地下き裂が重要な役割を演じていることが明らかになりつつあった。1993年からは世界の地熱開発プロジェクトの間で国際共同研究を立ち上げ、10年ほどそれを率いてきた。その一方で、「何のために地熱開発をするのか」、「そのエネルギーはどのように用いられるべきなのか」を考え続けてきた。そして2002年には、「地域のエネルギーを地域のために最大限活用する」*E I M Y* (*Energy In My Yard*) という概念にたどり着いたのである。それ以来、「地域とは何なのか」、「地域のため」とは何なのか、「環境共生社会とはどのようなものなのか」を身の丈の地域実践研究を通して考え続けている。

なぜ研究者は地域に入ろうとするのか

近年、大学や学問の社会貢献が声高に叫ばれ、社会との接点を求める研究者や研究機関が増えている。しかし、その接点の多くは行政や中央企業と言った「上からの流れ」に沿ったものであり、生身の社会とはほど遠いものである(図2)。

では、地域社会に入ろうとする研究者の目的は何であろうか？ それは、論文を書くため、研究成果

の社会実装のため、啓蒙や指導のため、研究予算獲得のため、あるいは社会貢献の実績づくりのためなどであったりする。

論文を書くためということは、学術の進歩に貢献し、かつ研究者としての自分の実績を積むためであり、成果は学術論文である。学術論文には、普遍性、新規性、独自性といった学術的価値が不可欠である。そしてその学術的価値は、その研究者が所属する学界の価値観に沿ったものである。一方、地域が直面している課題の多くは、個別的であり、ありふれたものであることが多い。研究者はそのような地域に入り、地域の課題とは無関係に、自分の研究のシナリオに都合のよい材料を集めて歩くことになりがちである。専門家というものは自分の専門を通して物

事を見る性癖をもっている。これは自分の専門の筋道に沿った見方でしか地域を見るができないことを意味している。資料の収集に地域の人々の多大な協力を仰ぎ、その成果である学術論文は、地域のためではなく、研究者自身のためであり、地域は見せ物か、使われただけということになってしまう。

では、研究成果の社会実装のためというのはどうであろうか。このとき、この研究成果というものは、多くは地域の個々の実体とは無関係に机上か実験室で生まれたものである。地域の実体に無関係に考えられたものを、ある特定の地域で実際に機能させようとしても、その成果を生み出す以上の困難が予想されるだろうし、たとえ実装できたとしても、それが地域にとって望ましい効果を生むかどうかは別問題である。

啓蒙や指導のためというのとはなべて上から目線である。情報化社会の現代にあつて、どんな片田舎でも、この上からの流れに沿った知見はネットやマスコミによって容易に触れることができる。そして何よりも研究者にとって生産的ではない。

研究予算獲得のため、というのはどうであろうか。その研究費によって地域が潤うことにもなる。しかし、補助金・助成金の採択の基準や成果に対する評価は、先進的、普遍的、短期的なものに目が行きがちで、本来不可欠なはずの、地域では避けて通れない現実的な課題や長期的な課題の解決には目が向いてないことが多い。なぜなら、それらの課題はありふれたものが多いからである。また競争的研究資金では、決められた期間内に、多くは年度ごとに、一定の成果を上げることが要求されるが、その期間は長くとも5年である。このため、その期間内に成果があがる課題だけが取り上げられることになる。このように、予算獲得のために設定された課題は長期的視野に立ったものではなく、また、地域の本質的課題や住民の意識とはかけ離れたものになりがちで、研究期間が終了すると同時にその活動は消滅することになる。

ある組織が社会貢献の実績づくりのために地域に入ることも多いが、もし地域から学ぶ姿勢がなければ、それは押しかけのであり、論外である。

外部依存体質や専門家依存体質の地域では、そのような外からの動きを歓迎するかも知れない。しかし、過去において研究者との間で苦い経験を持っている地域では、それに懐疑的であったり、そもそもあてにはしていない。その一方で、研究者が入り優れた成果をあげている地域も多い。そのような地域は、主体性を持って、よそからの研究者とつきあう術に長じていることが多い。

研究者や行政と地域との距離

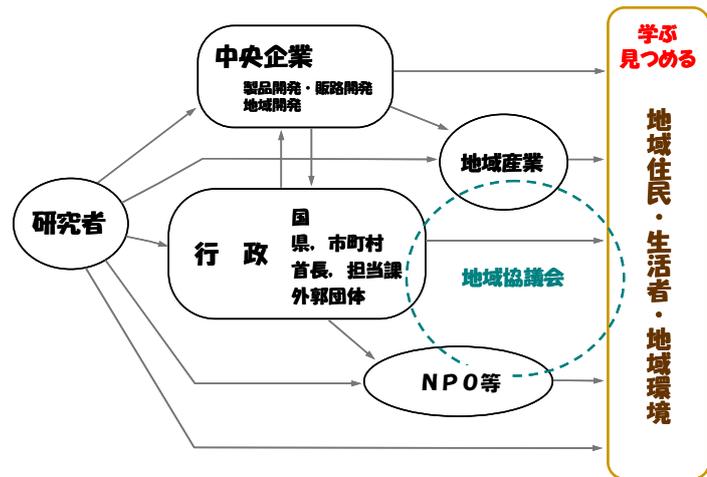


図2：行政や企業を通しては、生身の地域は見るができない。研究者は自ら地域に入りそれらを見つめ、学ぶことが重要である。

地域と在来知というもの

地域とは、ある空間に今人々が暮らしているだけのものではない。長い歴史を経て自然とともに暮らしてきた地域の人々は、何代も前の先祖から自然とともに暮らす知恵を引き継ぎ、何代も先の子孫のことを考えて暮らしている。そこでは環境共生や持続可能性は大前提であった。そして人々はお互いを思いやり、その地域の知恵を共有してきた。これが「在来知」と言われるものである。震災では、このような地域の人々の知恵と力が発揮され、世界中から賞賛を浴びたのである（図3）。

福島第一原子力発電所の大事故は、放射能で汚染された地域から人々を引き剥がしたばかりではなく、無数の関係性からなる、地域に暮らす人々の歴史的な知恵の流れも心の流れも遮断してしまった。決して現在の暮らしを補償すれば済むものではない。

現代の科学技術が、この地域々々の在来知を十分に読み解いているとは思えない。むしろ在来知を無視し、何にでもあてはまる原理とどこでも使える技術をもって力づくで地域に踏み込んでいる。そしてこのことが世界中の環境問題を引き起こしていると言っても過言ではない。そのようにして、自然に抗して設置された原発は、地域性の強い大津波の襲来によって大事故を引き起こしてしまったのである。

在来知の参究と継承

地域の風土というものは非常に地域性の強いものである。同じ地区の隣の畑であっても、土壌や水はけ、あるいは風の道が異なったりする。このような地域の風土とのつきあい方は地域の人が一番良く知っている。そこには将来環境共生文明を実現するための諸々の鍵が隠されている。

この「在来知」は単なる知識や技ではなく、地域の人々の人間性と一体となった知恵である。そこには、地域の人でなくては感じることでできない、畏れのような感覚や感情のように、人々の信心、精神、気質のようなものと不可分のものもあれば、その地域の人々の心情に沿った、地域社会を構成し維持するためのしかけが含まれていたりもする。これらは当地人達が意識もしていないものも多く、また、その地域の当事者になって初めて理解できるようなものも少なくない。

そこでは、研究者が金魚鉢を上から眺めるように、行動や意思決定のような表面に現れた事象だけを自分の専門を通して都合よく解釈するような「研究」ではなく、実社会の生身の課題を生身の人間として、己を虚しくしてそのまま「参究」するのでなければならない。このようにして、地域が直面する課題に、当事者として真正面から取り組むことにより、これまでの学問領域の狭間にある本質的な問題が見えてくるであろうし、在来知を真に理解することにつながると思う。

しかし、在来知を知ったり理解しただけでは意味がない。在来知はその地域の長い歴史の産物であり、それは時代々々によって変遷する動的なものである。人の知恵というものはその時代々々において命を吹き込まない限り次代に伝わるものではない。地域の人々は、その時々において、災害、疫病、飢饉、外的社会状況等、幾多の困難に直面し、それまでの在来知にその時代の創意と叡知を吹き込みながら、その知を蘇らせて次代に伝えてきた。地球環境の危機が叫ばれ、東日本大震災に続く東京、東海、東南

地域に暮らすということ

失ってはならない日本人のこころの原点・文明の基盤
自然と向き合い、死と向き合って暮らしている人々のすごさ

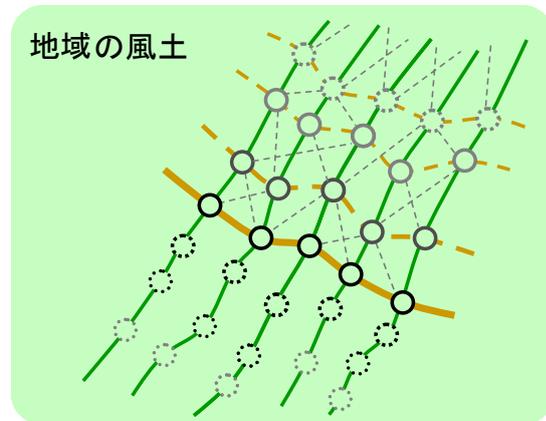


図3：地域の人々は、何代も前の先祖から自然とともに暮らす知恵を引き継ぎ、何代も先の子孫のことを考えて暮らしている。

海の大震災の予兆と、現代人の心の不安と荒廃を前に、今、我が国の環境共生社会の在来知を参究し、それを現代社会に活かし命を吹き込むことが、それを残してくれた先祖と我々の子孫に対する現代人の務めなのではないだろうか。地域に入る研究者の果たすべき役割は大きい。

虹色の世界と灰色の世界

西洋自然科学では、普遍知、統合知なるものが重要視され、その手法が大きな成果をあげてきた。そこでは個々の事例を総合し、そこから普遍的な原理や本質的な要素を客観的にあぶり出していく。そしてそれが国際的に認知されればグローバルな統合知となる。環境問題や地域の問題においてもこの手法が用いられ、このグローバルな統合知を地域に持ちこんで問題解決を図ろうとするのが一般的である（図4）。これは Think globally, act locally という標語に端的に表れている。

しかし、私はこれは間違っていると思う。一つ一つの地域は、良くも悪くもそれぞれいろいろな個性と特色を持っている。それぞれの地域の中で人々は、いろいろな問題を抱えながらも、工夫し妥協しながらその地域に住み着いてきた。各々の地域はそれぞれの虹色を持っているのである。もし、これらの虹色の地域の情報を総合し、そこから普遍的な知見を得たとしたら、それはそのほんの一部であるばかりか、各々の地域の持つ個性や特色は失われ、それは灰色の世界になってしまう。そして、この日本中どこでも、いやグローバルに通用する世界には、黒いメカニズムや灰色のメカニズムが渦巻いていることも事実である。「上からの流れ」もこの灰色の世界から発していることが多い。それぞれの地域は、一見高尚で優勢な灰色の世界の情報や圧力にさらされながら、自信を失い不安に思っている。この個々の虹色の地域のモードはそのまま個人にもあてはめることができる（図5）。

この度の震災で我々は、大自然の摂理は人智をはるかに超えたものであることを思い知らされた。それと同時に、各々の虹色の世界は、人間のさかしらを超えて、その身そのままこの大自然の摂理につながっていることを実感したのである。「海に恨みはない」という被災者の言葉がこれを表している。この実感こそが自然と向き合ってきた被災地の復興の原動力になっている。我が国の多くの地域で

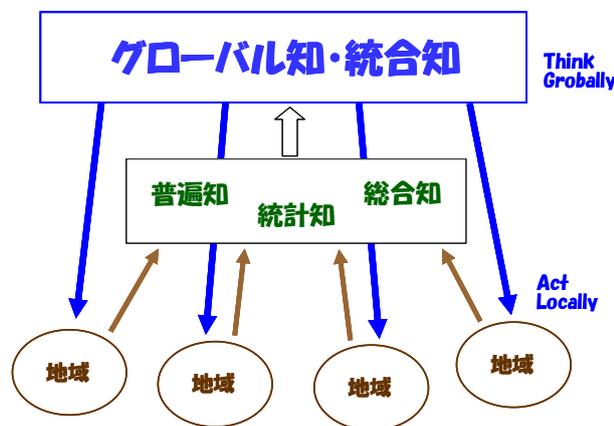


図4：科学では、個々の事例を総合し、そこから普遍的な原理や本質的な要素をあぶり出し、グローバルな統合知を得る。この統合知を地域に持ち込んで問題解決を図ろうとするのが一般的である。

虹色の世界と灰色の世界

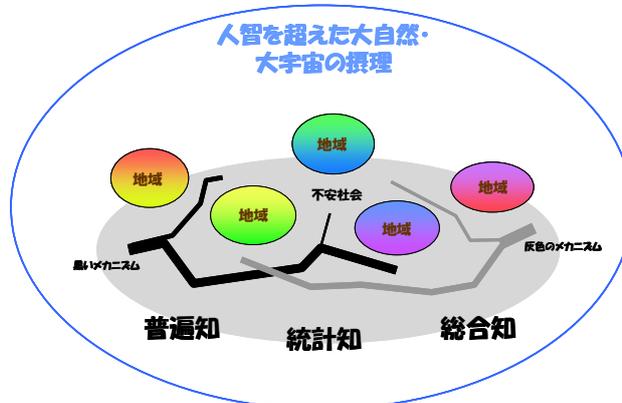


図5：一つ一つの地域は、それぞれいろいろな個性と特色を持っている。もしこれらの虹色の情報を総合し、そこから普遍的な知見を得たとしたら、それは灰色の世界になってしまう。地域が輝くことは、この虹色が輝くことにほかならない。

はそれぞれに困難な問題を抱えている。この問題を克服することは、灰色の世界になることではなく、それぞれの虹色に輝くことであると思う。

文明の大転換期にあつて

東日本大震災とそれにともなう福島第一原子力発電所の重大事故、それに続くとされる一連の大災害、そして制御不能に近いグローバル経済を受け、我が国の現代文明は今、大転換期にあると言えよう。このような混乱期には、従前の社会のメカニズムは機能しなくなり、人心は迷い、荒廃する。そしてこのような時代には、それらを救う巨星が現れることは歴史の教えるところである。キリストや釈迦、そして我が国では鎌倉仏教の始祖達がそうであった。これらの巨星達は、決して自らを高みに置かず、むしろ現実の世界に自らを投じた人達であった。今、出現が待たれるのは、観世音菩薩、地蔵菩薩、そして不動明王のような人達なのではないだろうか。「観世音菩薩は娑婆世界に遊ぶ」と言われ、マザーテレサのように社会の底辺にあつて人々を救う人である。地蔵菩薩は村（ムラ、組織）のはずれに立ち、そのムラの全てを見通し、そのムラの中で悩み迷う人々を救う人である。そして不動明王は、世の中の流れに動ずることなく、川底の大石のように自らの信念を貫く人である。この川底の石は、時には世の流れの変化によって干上がり、川べりの巨岩になるかも知れない。しかしこの不動の石は、ビーコンのように、流れに翻弄されている人々の位置を知らせてくれるのである。この不動明王は、川底の自分の立ち位置から世の中を見通し、心の底に深い怒りと悲しみをたたえている。

近年、科学者は世の中で使われる成果を上げることに腐心するようになった。しかし、本来、科学者は真理を探究し、世の中にそれを指し示すことが、その本源的な使命であり、今求められている不動明王そのものと言える。研究者は自らの成果をあげることにあせってはいないだろうか。田舎においては、爺様がやりたいと思った大計を、その孫子がやり遂げたという話はざらにある。文明の大転換期にあつて、自分では成果を見通せないような大問題を、ひたすら見つめ、ひたすら考え、次代に託すことこそが、今重要なのではないだろうか。

被災地の内外では、被災者の困窮をよそに、従前の上からの流れに沿った復興バブルが吹き荒れている。数年後、この復興バブルが去った後、被災地に何を見るのであろうか。今、被災地でも地域からの視点が求められている。

参考文献・ウェブサイト

新妻弘明 2011 「地産地消のエネルギー」、NTT出版

新妻弘明 2011 「震災に学ぶ」、日本EIMY研究所報 EIMYJ-1103

日本EIMY研究所 <http://ve.cat-v.ne.jp/ni.eimy/index.html>

新妻弘明

Hiroaki NIITSUMA

1947年生まれ。東北大学名誉教授。工学博士。日本EIMY研究所所長。エネルギー・環境学。EIMY (Energy In My Yard) の概念を2002年に提唱し、その実現のための実践的研究を、岩手県、宮城県、福島県、長野県などで行っている。著書に「地産地消のエネルギー」（NTT出版）など。

